情熱深く 障害者ピアノ

障害者ピアニストが競い合う「国際障害者ピアノコンペティション」の受賞者らによるコンサートが9月10日、東京都渋谷区の国立オリンピック記念青少年総合センターで開かれる。主催者は、ピアニストの隠された才能や、工夫する姿を広く知ってもらう機会にしたいと、インターネットによる寄付金、クラウドファンディングで開催費用の一部を用意して臨む。

●9月にコンサート

コンペティションは、元武蔵野音大准教授でピアニストの迫田時雄さん(82)の呼び掛けで2005年に始まった。国内外の演奏家や福祉関係者が賛同し、初回は横浜で開催。その後ほぼ4年おきに各国で開かれ、昨年の米ニューヨークでの大会には16カ国から31人が集まり、レベルの高い演奏を披露した。9月のコンサートには、この時の受賞者ら計15人が参加する予定だ。ベートーベンやショパンなどクラシックの演奏を見込んでいる。

●自閉症抱え銀賞に

出演者の一人、東京都練馬区の太田将誉(まさたか)さん(33)は、自閉症スペクトラム障害を抱えながら、昨年の大会で銀賞に輝いた。言葉より、作曲や即興で自己表現する方が得意なピアニストだ。

「頭を振りながら楽しそうに演奏していましてね。その幸せがずっと続いている感じです」。母の久美子さん(67)は幼少期を振り返る。1歳半の健診で脳波に異常が見つかり、障害があることが告げられた。成長への不安がなかったわけではない。しかし家にあったピアノやカスタネットを上手に演奏している姿を見て、4歳の時に音楽教室に通わせ始めた。そこで太田さんは複雑な和音をいくつも聞き取り、優れた音感を披露。即興曲を自在に弾きこなし、才能を磨いていった。

ところが、ピアニストを目指して音大に進学しようとした時に壁にぶつかった。受験向けのレッスンを受けたが、教師と視線が合わせられず、指示通りにできなかった。音大を断念し、失意のどん底も味わったが、専門学校に進路を変更。パニック障害で長期入院し、レッスンできない日々もあったが情熱を失うことなく修業を積んだ。

苦労は実を結び、障害者ピアニストのコンテストなどで受賞を重ね、名前も知られるようになってきた。自作の曲は編曲も含めて30曲を超える。太田さんは「人を癒やす曲を、作って弾けるピアニストになりたい」と夢を語る。

現在指導する薗田由紀子さん(49)は「障害があったために、『基礎』や『理論』が不足している部分があったかもしれないが、そのぶん、練習すればもっと表現力をつけることができるはず」と語る。久美子さんは「演奏を聞いて、同じ苦しみを抱えている人に、なにかの参考になればうれしい」と話す。

●支援の輪広がる

その他の出演者も、それぞれ手足や視覚、聴覚、知的障害などを持ちながらも、ピアノ演奏の熟達を目指す人たち。点字楽譜や特殊な補聴器を使うなどして腕を磨いてきた。難曲を弾きこなす技術を身につけた人や、テーマ曲を編曲して独創的な世界観を表現する人もいる。

コンサートには、ピアニスト本人のほか介助者の渡航費用が必要となるなど、資金面の負担も大きい。20年の東京五輪・パラリンピックに注目も奪われがちだ。開催費用は550万円で、コンサートを主催するNPO「アンハードノートピアノパラ委員会」が実施したクラウドファンディングでは、118人から計260万円が寄せられた。

迫田さんは「初回開催から10年以上たち、トップクラスのピアニストが育った。ぜひ聴きにきてほしい」と呼び掛けている。

コンサートは午後5時半開演。チケットはA席5000円、B席3000円で、申し込み受け付けは7月から、同委へファクス(03・3269・7398)で。詳しくは、同委ホームページで7月に案内される。【山崎明子、写真も】

レッスンに励む太田将誉さん(左)と薗田由紀子さん=東京都練馬区で

◀コンサートを主催する「アンハードノートピアノパラ委員会」のホームページ。前回大会などの動画が見られる